アイデアは決して的外れではありません。もちろん、そのためには遺跡保存の措置ならびに観光者との良好な関係を取り結ぶ仕掛けが必要であり、遺跡保存整備がそうした役割を担うことになります。もちろん、遺跡を保存整備すれば、観光資源となりうるということではありません。個々の遺跡の観光資源としての資質が大きく関係するからです。また、観光資源とはなりえても地域が観光地として立ち行くとも限りません。観光資源として単独で魅力的な遺跡はきわめて少ないし、良好な観光地であるためには良好な観光施設も不可欠な要素であるからです。

遺跡研究室で昨年からおこなっている大規模遺跡の整備・管理・活用に関する研究では、こうした観光と遺跡の関係という視点も含めたアプローチをおこなっているところです。

（文化遺産研究部　小野健吉）

白水阿弥陀堂（福島県いわき市）
園池を発掘・整備し、観光資源的価値を増進

## 平城宮跡第一次大極殿正殿復原工事

文化庁が進めている平城宮跡第一次大極殿正殿復原工事は、基壇下部の凝灰岩化粧工事を完成させました。大極殿正殿本体は、基壇内の免震装置を本年４月半ばから設置し始める予定で、基壇上面の完成は来年２月末になる予定です。2003年２月末現在、

大極殿基壇全景（南東から）

素屋根の建設基礎工事に着手しており、完成は2004年１月末の予定です。写真は、今年１月初めの工事進捗状況です。

（平城宮跡発掘調査部　渡邊康史）

## 研究室紹介

### 保存修復科学研究室（埋蔵文化財センター）
### Conservation Science Laboratory

保存修復科学研究室は、遺跡・遺物の保存と修復に関する科学的調査・研究をおこなっています。基礎研究として遺跡の構築部材や出土遺物に関する材質および構造研究と新しい調査法に関する開発研究もおこなっています。また、平城宮跡などから出土した遺物の実際的な処理をおこなうと同時に、技術的開発研究とその実用化もすすめています。

当研究室では、これらの新しい調査法や保存修復技術に関する情報を、学会や保存科学研究集会をはじめ、地方公共団体の発掘技術者を対象とした保存科学研修などを通じて公開しています。また、協力事業の一環として、地方公共団体などがおこなっている発掘調査や整備事業において、遺物の取り上げや応急処置をはじめ遺構の修復処理や復元法に関する専門的・技術的指導と協力をおこなっています。これらの活動は国内だけではなく、広く海外にもおよびます。2002年度は、ユネスコが実施したクムトラ千仏洞における現地環境調査と壁画顔料の材質調査の協力をはじめ、中国・炳霊寺文物保護研究所（甘粛省）が実施した涅槃塑像の修復事業の協力やイースター島・モアイ石像の保存処理に関する基礎研究をチリ国立文化財保存修復研究所と共同で実施しました。

最近おこなった開発研究では、オートラジオグラフィを利用した材質調査があります。この方法は遺物から発生している微弱な放射線を二次元放射線検出器としてのイメージングプレートに放射線エネルギーとして蓄積する方法で、レーザー励起によるルミネッセンス量をディジタル化して数量化・画像化することによって古代ガラス材質の同定を可能としました。この開発によって一度に数百点の古代ガラス遺物の材質同定が可能となり、日本列島における古代ガラスの流通が解明されることが期待されます。将来は、さらに他の遺物へと応用が広がる画期的な

手法でもあります。いっぽう、保存処理の分野では、従来から困難とされていたクスノキなどの交錯木理を有する大型木材の真空凍結乾燥法による開発研究が成功し、実用の域に達したことは、今後、より困難な大型出土木製品の保存処理に期待がもたれます。

（埋蔵文化財センター　肥塚隆保）

**文化財情報研究室（埋蔵文化財センター）**

文化財情報研究室では調査員２名からなり、15名の派遣職員の協力を得て、データベースの更新作業をおこなっています。また、さまざまな文化財からいかに有効な情報を引き出し、それをどのように電子化していくかについての研究もおこなっています。その一環として、遺跡に関する情報の統合的分析のために、GIS（地理情報システム）の研究も進めています。

当室で直接に入力作業をしているのは、図書データベース、遺跡データベース、写真データベース、航空写真データベースなどですが、他のデータベース、例えば木簡データベースなどに関しても、設計や文字データの変換、画像データの調整などに係わっています。また、データベースサーバやファイルサーバの管理・運用もおこなっており、内容面とともにハード面でも、管理部文化財情報課と協力して、奈文研の情報システムを支えています。

データベースにおいては、情報の信頼性が大切です。種々の資料からデータの入力をおこなっていますが、資料そのままを入力するのではなく、参考文献にあたったり、いろいろな辞書を参照しながらの作業となります。　（埋蔵文化財センター　森本　晋）

データ入力作業風景

## 退官に寄せて

**初めて奈文研に来た日**

1969年の３月下旬、ポカポカ陽気のその日、私は東京を出て近鉄奈良駅に降り立った。プラットホームは木製の桟橋ふうで、それはまだ地上に出ていた。東文研の関野克先生と一緒だった。多分、先生は所用があって、ついでに、４月から奈文研にお世話になる私を連れて来てくださったのだろう。春日野の研究所本部でご挨拶をした後、ライトバンに乗せてもらい、バラック街さながらの平城砦に着いた。田圃のど真ん中にポツンとその一角をなしていたので、そう思えた。そこは平城宮跡発掘調査部、その拠点だった。拠点の案内人は、黒セーターの端正な顔立ちの男性だった。その人は町田章現所長だった。入所後のほとんどの期間を町田さんの直属で過ごしたのも深いご縁を感じる。発掘の成果、保存科学的な問題点を中心にご案内いただいた。

澤田正昭さん

管内を一回りしたところでちょうどお昼時となった。帰ろうとして、事務所にご挨拶に伺ったら、優しそうな眼鏡の先生が「昼飯を食べていきなさい！」と親しげに声をかけてくださった。これから仲良くしていただくためにはそれもいいかと、食堂という名のプレハブ小屋についていった。30人くらいがいっせいに昼食をとる。家族的でほほえましい光景だった。座席を確保したところで、ふと、入籍したばかりのわが妻をひそかに外に待たせていたことを思いだした。今さら帰るというわけにもいかず、わけを話した。「オーッ！連れて来い！」。親睦をモットーにしている私は、妻と二人で昼飯をごちそうになった。ネギがたっぷり入ったみそ汁がおいしかった。やさしい先生は狩野久さんだった。何とも厚かましい新人である。その年の７月には、調査部の同僚３人と共に結婚のお祝いをしていただいた。恒例のチョンガー惜別の洗礼を受けるのが慣わしだったからだ。洗礼のようすを書く余裕は無いが、激しくも思い出深いパーティだった。

あっという間の34年間でした。楽しい思い出ばかりが脳裏をかすめる今日この頃です。奈文研に、そして先輩・同僚のみなさまに心からの感謝を申し上げる次第です。ありがとうございました！！

（埋蔵文化財センター長　澤田正昭）